

患者物語り

何も見えなかった。

激しい頭痛がしている。リタは自分がどうなっているのかわからなかった。

でも音は聞こえた。動き回る足音、ドアを開ける音、木の葉が風で揺れる音、小鳥の鳴声。どれも聞き慣れた音だ。落ち着いてみると、リタはベッドで仰向けに寝ているのだとわかった。窓が開いているのか、風が体の上を通り抜けていくのがわかる。

部屋のドアの開く音がして、足音がベッドに近づいてきた。それと同時に変な匂いがした。ツンと鼻に突き刺さるような刺激的な匂いだ。

突然、額に手が触れた。冷たい。お母さんの手じゃないとすぐにわかった。お母さんの手よりごわごわしている。でもお父さんの手じゃない。お父さんの手はもっと大きいし、もっとごわごわしている。知らない人だ、誰だろう。

「目が覚めたかね」

知らない人が尋ねている。けれど何も見えないので、リタは答えられなかった。目が覚めたら、前が見えるはずだから。

「マルカ、娘さんの目が覚めたようだよ」

知らない人がそう言う。

「リタ　だったかね。お前は怪我をしたんだよ。あたしは治療師だ。お前は目を怪我したんで包帯をしている。いま、スープと薬を持ってくるから、飲むんだよ。さあ、体を起せるかね」
リタは背中を押されて、体を起した。動くともた頭痛が激しくなった。

「マルカ、スープを持ってきておくれ。思い出したかね。お前は昨日の夕方木の枝に顔を打ちつけて目に怪我をしたんだ。それから一晩経って今は朝だよ」

足音がした。そう、これはリタのよく知っている足音だ。お母さんの足音だった。

「リタ、この治療師はお母さんの古い友達でも腕のいい治療師なの。わざわざ街から来てもらったのよ。しばらくこの村に居てくれるそうなの。傷は痛む？」

「うん」

「当たり前のことさね。これで痛みがなかったら、それこそ大事だよ。生きているから、痛みもあると思うことだね。さあ、スープをお飲み、栄養を取らないとね。スプーンは無理だろう。構

わないから器に口を付けて飲んでしまいな」

唇に器が触れたので、リタは手を伸ばしてそれを掴んだ。お母さんの手に指が触れた。リタがしつかりと器を持ったことを確かめてから、マルカの手は離れた。

口を動かすと、頬から目にかけてまた痛みが走った。スープには玉葱が入っていて、その甘みがおいしかった。

「よし、ほら、スプーンを渡すから残りを掻き込んでしまいな。なに、少しくらいこぼれたって構うものか。もう一杯食べられるかね、無理しなくても食べた方がいいんだが」

「うん、おいしい」

「よし、いい子だ。マルカ、もう一杯持ってきておくれ。そしたら、交代して台所を使わせておくれ」

お母さんがスプーンのお代わりを持ってきて、治療師が出ていく足音がした。

「ペタニ小母さんが心配していたわよ。怪我をしたあなたをうちまで運んで来てくれたのもペタニ小母さんなの。すぐく取り乱していて、あたしが悪いんだって言うばかりなのよ」

「ペタニ小母さんは悪くないわ。あたしが不注

意だったの」

「治療師を呼んで来てくれたのもベタ二小母さん。おかげで、豚たちは一日餌抜きになってしまったそうよ。治療師が大丈夫命に別状はないと言つてようやく、豚のところへ帰つていったの。お父さんも心配してうるうるしていたんだけど、仕事をしていた方が落ち着くからって鍛冶小屋に行つてしまつたわ。それを食べ終つたらお父さんも呼んでくるわね」

治療師が薬を持ってきた。

「さあ、これをお飲み。苦いけど吐かないでおくれよ。ほら、熱いから気をつけて」

治療師の出した器には苦い薬が入っていた。ちよつとお茶のような味も混ざっているが、苦い味と鼻をつく匂いがした。しかもお椀にたつぷりあつて、なかなか飲みおわらなかつた。スープを飲んだ後なので、お腹の中が水分でいっぱいになつてしまふ。

「熱冷ましと痛み止めだからね。少しは楽になるだろうさ。また明日様子を見にくるけど、それまでに何かあつたらすぐに呼びに来ておくれ」治療師の声には人を安心させる効果があるようだ。治療師が出て行くと、しばらくは静かに

なった。また、小鳥の声や風の音がよく聞こえる。そして頭の痛みもまだ激しい。けれど、治療師が言ったように痛みは生きているしるしなのだ。

間違えようのない大きな足音を立てて、お父さんがやってきた。

「ああ、リタ。目が覚めたかい。痛くはないかい」「痛いわ。でも生きているから痛いんだって、治療師が」

「そうか、痛み止めの薬は貰ったかい」

「うん、今飲んだところ。でもそんなにすぐには効かないと思う」

「何か気晴らしになるようなものでも持ってたよつか？」

「でも、目が見えないから」

「ああそうか。でも心配しなくていいぞ。よくなって包帯を取れば見えるようになるぞうた」

リタはそれを聞いて少し安心した。もしかしたらずっと目が見えないのではないかと思っていたのだ。

「リタ、スープまだあるけど飲む？」

「ううん、もうお腹がいっぱい。それに口の中にお薬の味が残ってるから、あんまりおいしく

感じないと思うわ」

「じゃあ、眠りなさい。体を休めた方が治りが早いはずよ」

リタはまたベッドに横になった。

お父さんとお母さんが部屋から出て行く足音がした。

話すこともなく、じっと横になっていると、痛みばかりが意識される。どのくらいしたら、お薬が効いてくるのだろうか。

気を紛らわせるために、リタはお話のことを考えてみた。義賊も組合を作っているのだろうか。サラはカラタお姉さんからお話の続きを聞いたのだろうか。

そんなことを考えているうちに薬が効いてきて、痛みがやわらいだのだろうか、リタはいつの間にか眠っていた。ドラゴンになった夢を見た。傷ついたドラゴンだ。人間に弓を射かけられ、槍を突き刺されて、洞窟に逃げ込んでいる。傷口からは膿が流れ出して止まらない。

眠りは浅くてすぐに目が覚めてしまった。そしてリタは小便が溜まっていることに気づいた。どうやって、トイレまで行こうと思いつながら、なんとかベッドの上に体を起した。目が見えない

から、トイレまで行くのは大変だ。家の中は壁に手を当てていけばなんとか進めるとは思うが、トイレは外にあるから、壁づたいには行けない。リタがそんなことを考えながら、ベッドを離れようとしていると、お母さんの声がした。

「どうしたの？ リタ」

「トイレ」

「わかったわ。立つても大丈夫？ ふらふらし
ない？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ、連れていって上げるわ。ほら手を握って」
リタはお母さんに手を引かれてトイレに行った。歩いていくうちになんだかふらふらしている気がしてきた。けれど大丈夫と答えてしまったので、言い出しにくかった。

トイレのドアを開けてしゃがむと急に気持ちが悪くなった。そのままじっとしているとなんとか気持ち悪さが収まってきたので、用をたした。立ち上がるとまた気持ちが悪くなったので、少し壁にもたれていた。トイレだけでもたいへんだわとリタは思った。

雨水桶から出る水で手を洗っている時にリタは急に思い出した。

「今日は泉の水を汲んでないわ!」

「何言ってるのよ、リタ。母さんが汲んできたから大丈夫。心配しないで」

「あたしの仕事なのに……。」「めんなさい」

「確かに怠けるのはよくないって言ったけど、いまは怪我をしてるんだからいいのよ。治ったらまた働いてもらうから、おとなしくして早く治るようにするのよ」

「はい」

再びベッドに入ったリタが目を覚ました時、夕方方になっていた。目が見えなくてもなんとなくあたりが暗いことにリタは気づいた。頭痛は少し収まっていて、その代わり左目が痛くなってきた。これまででは、目も含めて頭全体が痛いという感じだったが、痛みが別れてきたようだ。

「リタ、起きたの」

ベッドの上に体を起したリタの気配を感じたのか、台所からお母さんの声がした。

「うん」

「じゃあ、ちょっと待ってて、もうすぐ夕飯だから、みんなで食べましょ」

しばらく夕飯の支度をする音が響いていた。リ

夕は音だけからお母さんが何をしているのか当
ててみようとした。あれは野菜を切っている音、
あれは火を起している音、あれは鍋に水を入れ
ている音、あれは戸棚から食器を出している音。
それからドアを開けて出ていったのはお父さん
を呼びに行ったのだろう。家の中にひとりにな
るとなんだか寂しい気がしてきた。でも耳をす
ませば、風の音や鳥の声が聞こえる。遠くで怒
鳴っているのは、トナヤの親父さんだろう。あ
の家の三人の息子たちはどうしようもないやん
ちゃものだから。

カラスが鳴きだした。すぐ近くで鳴いているの
か、うるさいくらい大きな声だ。

「よう、リタ。こっちで食べられるか」

お父さんが帰ってきた。

「うん」

リタはできるだけ元気よく返事をして、手探り
で台所に向かった。

「さあ、こっちだ」

リタが台所に入ると、お父さんがリタを抱き上
げて、椅子に座らせた。

今日の夕食は、パンと炒り卵と玉葱のスープ
で、リタは皿に口をつけてもいいことになって

いたから、どれもひとりで食べられた。お行儀が悪いのは分かっているけれど、手伝ってもらう方が恥ずかしいと思った。それに、どんなに行儀が悪くても、自分では見えないのだから気にしないことにした。

「お嫁に行かないで、ずっとうちにいてもいいんだぞ。その方が父さんも寂しくないからな」

「あなた、今から何を言ってるんですか」

お母さんがお父さんの足を蹴飛ばす音がした。ほんとにお父さんたらどうして急にそんなことを言い出したんだらう。リタはちょっと不思議に思った。

「そうだ、リタ。お前に指輪を作ってやるうか。父さんが鉄の指輪を作って、街のメッキ職人に銀メッキしてもらおう。そうすれば銀の指輪と区別がつかないぞ」

リタはなんだかお父さんが急にやさしくなったので、不安になったが、きつと怪我をしたからだろうと思った。それに銀メッキの指輪ならそんなに高価というわけではない。もちろん、リタは指輪が欲しかった。

「でも、指輪をもらえるようなことを何もしてないわ。怪我をしたのはあたしの不注意だから、

それで指輪をもらつわけにはいかないわ」

「頑張つて痛みに耐えているからだよ」

「自分の不注意で怪我をしたんだから、痛いのもそれに耐えるのも当然のことじゃないの。それに、実は耐えてないの。治療師のお薬がなかったら泣き叫ぶところだわ」

「贈り物は文句を言わずに貰うもんだぞ」

「ふふ、あなたはこの娘に勝てないわよ。お父さんはリタがあまりかわいいで惚れてしまったのかもね。まあ、あたしの立場はどうなるのかしら」

「おい、冗談はよせよ」

「リタ、食べおわつたらお薬を飲みなさいね」

「はい」

リタは治療師が朝作つて残していった冷めた薬を飲んだ。朝飲んだ時よりも苦くなっているよくな気がした。それからベッドに入った。昼間たくさん眠つたから眠れないかと思つたが、薬に眠くなる効果もあるのか、やがて眠ってしまった。夜中に一度目が覚めた時、お父さんとお母さんが何か話している声が聞こえたが、何を話

しているのかまでは聞き取れなかった。

次の朝、食事を終えたところに治療師がやってきた。

「さあて、リタ。包帯を取って傷を見てみようかね。ちよつと、ほんのちよつと、痛いかも知れないけど我慢するんだよ。なに、叫んだって構わないけどね。ただ、暴れないでくれ。」

「痛いのか？」

「痛いかもしれないねえ。たぶん、痛いだろうね。」
そう言いながらも治療師はリタの頭に巻いた包帯をほどいていく。包帯を透かして、目の前でなにかが動くのがリタに見えた。そして突然、小さな目をした小柄な女性が目の前に立っている姿が見えた。そして目に痛みを感じた。

「さて、ふんばっておくれよ。」

治療師はリタの左目のまぶたを持ち上げて、中の様子を見てからぐいぐいと布を押しつけて、塗ってあった薬や染み出していた体液を拭い取りつた。リタは最初腹に力を入れて耐えていたが、途中から我慢出来なくなつて、あーともぐーともつかない叫びを上げていた。

「よし、もうひとふんばりだ。」

治療師は小さな壺に入った軟膏をへらですくいて取ると、リタの左目に塗りつけた。傷口の奥まで届くようにへらを差し込んだりして丁寧に塗った。リタは再びうめき声を上げた。治療師がまぶたを下ろして包帯を巻きはじめると、リタはようやく息がつけるようになり、はあはあと大きく息をした。

「どうして右目も包帯をしちゃうの？」

「その方が治りが早いからさ。片方の目を動かすと、もう片方の目も同じように動こうとするからね」

治療師が左目をいじったので、リタは再び頭全体が痛くなっていった。なんだか治療をする前よりも痛くなっているようだ。すこし不安になってきた。

「なんだかさつきより痛くなっているみたい」

「ああ、いま傷口に触ったからね。今は痛いかも知れないけれど、膿んだらもつと痛いし、いつまでもずっと治らないし、頭の中まで膿がまわったら大変なことになるから、痛みは我慢するんだよ。いまから、痛み止めの薬を作ってやるから、それを飲めばまた少し楽になるさ」

治療師はそう言って台所に去った。

「でもよかったわ、酷いことにならなくて」

お母さんはそう言ったけれど、リタには十分酷いことになってきている気がした。それを他人のせいだとは思わなかったけれど。

「いつもあなたがよく手伝ってくれているのがわかったわ。毎日だと慣れてしまっただけで気づかないけれど。水汲みやらお使いやら」

「何か出来ることない？ 寝てばかりいるのも退屈だわ」

「ありがと。でも、見えない目で手伝ってくれている間に、別の怪我でもされたら困るから」

治療師が薬を持ってきた。

「熱いから気をつけて。それから言うておくからね。二三日、いや、十日は安静にしていることだ。いいかね、言うことを聞かないとベッドに縛りつけるよ」

「はい、わかりました」

「よろしい」

それからリタはおとなしく療養の日々を過ごした。トイレと食事の時以外はずっとベッドで横になっていた。治療師は毎朝リタの包帯を取っては傷口を調べ、軟膏を塗りなおした。一日に三

度薬を飲み、栄養のある食事をとった。

けれどもリタの想像力は休まなかった。カラタ姉さんがこれまでにしてくれたお話を思い出したり、まだ途中までしか話してくれていないお話はその続きを想像したりした。

怪我をして五日目の午後、サラが見舞いに来た。

「マルカ小母さんから少しよくなって退屈しているって聞いたから」

「そうなの。ずいぶん気分はよくなったし、痛みも酷くないのだけれど、治療師が包帯をとってくれないので、何も仕事が出来ないのよ」

「それは正解ね。さすが治療師だわ」

「何が正解なのよ」

「あなたはちょっとでも動けるようになるんですけど、無理をしてまた傷の具合を悪くするってこと。それより、カリタ姉さんのお話の続き、聞きたくない？」

「もちろん聞きたいわよ」

「そつでしょ。だったら、あたしの言うこと聞いてくれる？」

「えっ何？ 目が見えないから出来ることはあまりないわよ」

「簡単なことよ。口をあけて」

なのだけれど、騎士の義務で王宮警備隊に入っているのよ。とつても背が高く、ハンサムなの。剣の腕も一流で、頭もとつてもいいのよ。

ローランドは非番の時に妹の買い物に付き合つて市場に来たのよ。妹の名前はローズマリーっていうの。ローズマリーは男爵の娘だからお姫さまなのだけれど、奥様の子ではないの。でもとつてもかわいいのよ。お母さんがきれいな歌姫なのでその血を引いているのよ。

ローランドとローズマリーはとても仲良しなの。実をいうと男爵の子供たちはあまり頭がよくないのだけれど、この二人だけは別なのよ。でも二人の間には恋愛感情はないのよ。残念だけど……。ローランドは二十一歳で、ローズマリーは十二歳なの。そうそう、二人の乳母は同じ人なのよ。きっと二人の頭がいいのは乳母の教育が良かったのね。

それでローズマリーが買い物をしている間、店の外でぶらぶらしていたローランドが、偶然シーノがスリをしているところを見つけて捕まえてしまうの。ローランドはシーノがすったお金を返せば見逃してもいいと思っていたのだけれど、シーノはすごく暴れて、振り回した手がローラ

ンドの鼻に当たってしまうの。それでローランドはすごく怒って、シーノを牢屋に入れてしまうのよ。

ローランドは少し怒りんぼだと思っわ。でもハンサムだから、シーノにひっぱたかれて鼻が赤くなってしまうたせいで怒ったのかも知れないわね。それからシーノを牢屋に連れていったのは市場の警備をしていた警備兵で、ローランドはちゃんと妹の買い物に最後まで付き合ったと思っわ。

本当ならシーノはたいした罪じゃないのよ。百叩きにもならないくらいなの。でも王様は義賊が捕まらないのですごく怒っていたのよ。それでシーノを義賊の仲間だと思って拷問したの。拷問ってそれはとっても酷いことをするのよ。だめだわ、とでもリタには聞かせられないわ。

それでシーノは義賊の仲間だっって白状しちゃうの。ほんとは仲間じゃないのにね。でも仲間だっって言ったら、今度は隠れ家を教えろとか、頭領は誰だとかいうことでもっと拷問されちゃうのよ。そうそう、シーノはね、えーと、確か十六歳だったと思っわ。もともとあまりハンサムじゃない顔がもっと酷いことになっってしまうの。

それでね、シーノはきつと拷問のせいで頭がおかしくなっていたのだと思うわ。「うん言つのよ。」「きつと仲間が助けに来てくれる」って。だって、仲間じゃないのに変でしょ。でもそれでシーノは殺されずに済むの。

ローランドは反対したんだけど、義賊の手がかりが他になんにもないものだから、シーノをおとりにして義賊を捕まえようと王様は考えたのよ。それで街中にビラを撒くの。「義賊の手下シーノを明日広場で公開処刑する」って。

それで本当の義賊の仲間もそのビラを拾って読むのよ。義賊の頭領はそれを知って「こつ言つの。」「見殺しには出来ない」って。ねえ、リタ。素敵だとは思わない。

「畏ですよ、頭領」

「わかつている。それでも見殺しには出来ない」とかいうのよね。素敵だわ。

義賊はシーノを助けに来ないとローランドは思っているの。だって、シーノがただのスリだっ
て知っていたから。それに、おとりを使うよう
なやり方にも反対だったのよ。だってローラン
ドはいい人だから。それでローランドは仮病を
使って仕事を休んじやうの。

ところで義賊の頭領が誰だかわかるかしら？
そうなの、あの長身の女剣士なの。名前はサラ
マンダというのよ。なんだかあたしの名前に似
てると思わない？ 彼女はその国で生まれたの
だけれど、生まれてすぐに外国の奴隷商人に売
られてしまったの。

サラマンダは最初はふつうの奴隷としてお金
持ちの屋敷で下働きをしていたのだけれど、主
人に言い寄られて断ったので、拳闘士として闘
技場に売られてしまうの。あたしはこの主人っ
てきつと豚みたいに太った男だと思っただけど、
リタはどう思う？

サラマンダはその時は剣の修行をしていなかった
たのよ。訓練した拳闘士を戦わせる前に、凶悪
な獣の力がはつきりと観客にわかるように、ふ
つうの人間を獣の餌にするんですって。恐ろし
いことだと思わない？

でも大丈夫なの。サラマンダは地面から砂を
拾ってライオンに目つぶしをするのよ。それか
らはずつと闘技場を逃げ回って最後は観客席に
逃げこむの。ライオンもサラマンダを追いかけ
て観客席に突っ込むのよ。そして大騒ぎになる

の。いい気味よね。

「ああ、喉が渴いたわ、リタ。お茶をもらって
もいいかしら。勝手に煎れるわね」

「あたしにもちようだい」

「アップル・パイもまだあるわよ」

リタとサラはしばらくお茶を飲んでアップル・
パイを食べた。

それでね。サラマンダは度胸があるというの
で、本格的に拳闘士の訓練を受けたのよ。それ
からサラマンダという名前もそこでつけられた
の。拳闘士として観客に受けのいい名前が必要
だったのね。サラマンダの本当の名前はきつと
女の子らしいかわい名前だったと思うわ。サ
ラマンダも昔の名前は捨ててしまったの。

サラマンダは拳闘士として才能があったのね。
それにほんとうによく練習したのよ。それでサ
ラマンダは一流の拳闘士になったの。観客にも
ファンが大勢いたのよ。流れる金髪サラマン
ダとか呼ばれていたんだわ。

その時戦争が起ったの。拳闘士は兵士じゃない
から戦争には行かなくていいのよ。本当ならね。

でも戦争は不利な情勢で都にまで敵の軍が近づいてきたの。それでね、拳闘士も戦いに駆り出されたのよ。

サラマンダはもちろん大活躍したのよ。でも、戦争と拳闘は全然違うの。拳闘にはルールがあるのよ。それに戦争は隊列を組んで集団で戦うの。だから拳闘士たちはあまり役に立たなかったのね。結局、異国の都は陥落してしまつたの。

でもね。サラマンダは負けが決まりそうになると戦場を脱出するのよ。拳闘士の仲間も何人が彼女に従つたの。そしてみんなでサラマンダの故郷のこの国まで帰ってきたのよ。途中で泥棒をしながらね。

もちろん、お金持ちの家からしか盗まなかったのよ。その時はまだ義賊とは言えなかったのだけれど、この国に入ってからは貧しい人たちに施すようになったの。サラマンダは自分の生まれた国はもっと立派な国だと思っていたのね。でも実際は、他の国と同じでお金持ちばかりが威張っている国だとわかつたのよ。

いよいよシーノの公開処刑の日が来たの。お城の広場にはたくさんの方が詰めかけていたわ。義賊に宝石を盗まれて怒っているお金持ちの貴

族は、処刑を楽しみに来ていたわ。貧乏な人たちは、きつと義賊がシーノを助けに来ると思つて、それを見に来ていたの。

でも単に処刑を見物に来ていた人も大勢いるのよ。人が死んだり、血が流れたりするのを見るのが好きな人たちなの。それから、飴売りやジュース売りも来ていたわ。もちろん、スリの人たちも稼ぎに来ていたの。そして大勢の人の中には、変装した警備兵もたくさん混じつていたのよ。

広場の真ん中には一本の太い杭が打ち込まれていて、そこにシーノが縛りつけられていたの。その周りを制服を着た五人の警備兵が槍を構えて囲んでいたのよ。そこから十分間を置いて、柵がぐるりと張り巡らされて、観客が入つてこられないようにしてあったの。柵の近くには全部で二十人の警備兵が立っていたの。

ねえ、義賊たちはどうやってシーノを救い出すと思う。とっても難しいわ。でもそれだけじゃないの、実はその他に弓を構えた兵隊が十五人も物陰に隠れていたのよ。

「この者シーノ、盗賊団の一味として善良なる市民の財産を侵し、世間を騒がせた罪ははなはだ

大きい。しかも、その非を悔いず、捜査への協力を拒否していることは一層の罪である。よって、王国の法のもとに処刑を行うものである。」

とかなんとか、偉そうな帽子をかぶった大臣が言うのよ。そうすると観客からヤジが飛ぶの。「なにが善良な市民だ」とか「財産を侵しているのは重税だ」とかね。

「構え！」

その声がかかると、ヤジも止んで広場は静けさに包まれるの。そして、シーノの周りの警備兵が槍を構えて今にもシーノを突き殺そうとするのよ。

「そしてどうなったと思う、リタ。信じられないことが起るのよ。あたしにも信じられないわ。ほんとにどうしましょう。しかもよ、カラタ姉さんはここでお話を切って、続きは明日なんて言うのよ。ほんとに酷いわ。あたしはその晩眠れなくってよ。その上、広場の真ん中で処刑される夢を見てしまったわ」

「眠れなかったのに夢を見たの？」

「そのくらいドキドキしたのよ」

「それで、サラも続きは明日にするの？」

「あたしはカラタ姉さんほど意地悪じゃないわよ」

「明日でもいいわよ」

「やめて、続きを話さずにはいられないの」

その時、音も立てずに飛んできたナイフがシーノの胸に突き刺さり、血が吹き出すの。シーノはしばらくもがいてからがっくりと首を垂れて動かなくなってしまうの。

槍を構えた警備兵はどうしてよいのかわからなくて、顔を見あわせてうつろたえるばかりなの。そして、観客はざわざわと騒ぎだすの。

「馬鹿め、仲間はもう取り返したぞ」

高らかに響く声に、上を見上げると尖塔の屋根に二つの影が見えるのよ。一人はマスクをつけた剣士で、一人は小柄な少年なの。少年は尖塔の上で曲芸のように飛び跳ねて挑発するのよ。

「畜生！ すり替えられた」

警備兵の一人がそう言つと、処刑を取り仕切っていた大臣もあわててこう言つたのよ。

「あいつらを追え！」

弓をもった兵士が物陰から出てきて、尖塔に向かって弓を射かけるの。けれど高いところに弓を射てもなかなか当たらないのよ。尖塔の上の二

人は屋根づたいに逃げていくの。

警備兵たちはみんなでそれを追いかけるのよ。そして広場に集まっていた観客も警備兵と一緒に追いかけていくの。観客が広場の中央を通りすぎていくと、いつのまにか、杭は押し倒されて、そこに縛りつけられていた人もいなくなっているの。

どこかの路地裏で義賊の仲間が背負っていたシーノを下ろして、薬を飲ませるの。そうなの、広場でナイフに刺されたのはやはりシーノだったの。でもナイフには仕掛けがあったのよ。ナイフは特殊な形をしていて、深く刺さらないようになっていたの。それに血糊が仕込んであったのよ。それから、ちょっとだけ刺さるその刃の部分には痺れ薬が塗ってあったの。それで、シーノは死んだように動かなくなってしまったのよ。そして今義賊の仲間はシーノに痺れ薬の解毒剤を飲ませていたの。

屋根の上を走って、警備兵を引きつけていたのはもちろんサラマンドなのよ。シーノの偽者を演じたのは義賊の仲間の少女なの。二人は身軽に屋根の上を走って警備兵を引き離したので、そろそろ姿を隠そうとしたの。

その時、二人の前に現れたのがローランドなの。ローランドは仮病を使って警備の仕事を休んでいたのだけれど、自分の部屋で明るいうちから、ひとりでお酒を飲んでいたのでよ。なんだか騒がしいので、窓の外を見ると二人の人間が屋根の上を走ってくるじゃないの。ところで、ローランドの部屋は二階にあるのよ。

ローランドはすぐに剣を掴むと窓から屋根の上に飛び出して、二人の前に立ちはだかったの。サラムンダは連れの少女に身振りで逃げるように指示してから、さっと剣を構えたわ。

屋根の上で二人の剣士が向き合うの。一人は王国の警備隊の隊長で剣の腕も飛びぬけているローランド。一人は異国の拳闘士で連勝を続けた美貌の女剣士、でも今はマスクで顔を隠しているの。

ローランドはにやりと笑うと、さっと剣を振り下ろしたの。おとりを使うような卑怯なやり方ではなくて、正々堂々と向かい合って剣の勝負が出来るのがうれしかったのよ。

シユツと金属のこすれる音がして、サラムンダがローランドの剣を受け流すの。サラムンダは受け流しが得意なのよ。しばらくはローランド

が攻めて、サラマンダが受け流すという状態が続いたの。

やがてサラマンダを追いかけていた警備兵が追いついてきて、弓兵が路地で弓を構えたの。ローランドはそれを見て少しためらったわ。そして一瞬緊張が途絶えた隙に、急に酔いがまわってきたの。

そして弓兵の射た矢がサラマンダの肩をかすめ、サラマンダもバランスを崩しそうになるのよ。ローランドの剣がサラマンダのマスクを切り裂いて、たくしこんであった長い金髪が現れるの。金髪は一房切り取られて、風に舞っているのよ。

でもまだサラマンダの顔は見えないの。

同時にサラマンダの剣はローランドの膝を払って、ローランドは尻餅をついてしまうの。これは足場が悪いし、酔っていたからなのよ。その隙に、サラマンダは身を翻して屋根の上を走り去ってしまうの。

警備兵たちは、ローランドが病気だと思っていたから、顔が赤いのも、尻餅をついたのも病気のせいだと思ったのよ。それでローランドの名

誉は守られたの。

「きょうはここまでよ」

「面白かったわ、でもカヲ姉さんのお話とはずいぶん違うような気もするけれど」

「そんなことはないと思うわ。じゃあ、またお話を聞いてきたら教えてあげるわね」

「お話とアップル・パイありがとう」

「お大事にね、リタ。早く元気になってね」

治療師は前に言ったように十日目の夕方にリタの包帯を取った。急に明るくなってリタは戸惑ったが、目の前に治療師の顔が見えた。背は低いがよく太った中年の女性が治療師だった。黒い質素な服を着ていて、その服から変な匂いがしていた。

「まだ少し痛みがあるかも知れないが、少しずつ慣れていくだろうよ。それから、もう熱が出たり、激しい痛みがあったりすることはないとは思いますが、もしそうになったらすぐにあたしを呼ぶんだよ」

「ありがとう、ハンナ」

お母さんが治療師に支払いをしながら礼を言

った。

「なあに、これも仕事だからね。マルカから金
は取りたくないが、あるところから貰わないと
やっていけないから、もらっておく事にするよ」

「治療師もたいへんよね」

「まあ、組合の掟だからね」

お母さんに見送られて、治療師が出て行くと、
代わりにお父さんが入ってきた。

「よお、リタ。すっかり元気になったか。どう
だ、指輪は駄目でも、これならいいだろう」

お父さんが差し出したのは銀色に輝く眼帯だっ
た。治療師は何も言っていないかったけれど、こ
れからは包帯の代わりに眼帯をしなければいけ
ないのだろうかとお父さんは思った。

「ほら、着けてごらん」

お父さんがそう言うので、リタは眼帯を着けて
みた。革の紐を頭の後ろで結ぶ。

「よし、これなら、お城の舞踏会にだって出ら
れるさ。なあ、マルカ」

「さあねえ、王子様次第ね」

お母さんは腕を組んでちょっと困ったような顔
をしている。

リタは自分の眼帯をした顔と眼帯をしていな

い顔を見てみたかったが、既に薄暗くなってきていたので、水瓶を覗きこんでも、はっきりとは見えなかった。

「さあ、夕飯にしましょ」

夕食のあと、リタはすぐに寝るよう言われた。「包帯が取れたからって急に無理をしてはだめよ。手伝ってほしいことはあたしから言うから、それ以外のことはまだしないでね」

ようやく周りが見えるようになったと思ったら、すぐに夜になって寝なければいけないなんて納得出来ないわ。リタはふとんの中でそう思った。

次の朝、リタはお母さんの許しを得て、泉に水汲みに出かけた。何日ぶりかで吸う森の朝の空気はリタを清々しい気持ちにした。リタはいつもより早足で泉まで来た。そして泉を覗きこんで自分の顔を見た。

「まあ、これじゃあ、王子様からプロポーズされるなんてことはありそうもないわ」

リタはそう言っつて、もう一度泉に映った顔をよく見た。傷ついた左眼は白目が見えていて、目の周りにも細かい傷痕が付いていた。リタはお父さんがどうして眼帯をくれたのかわかった気

がした。

今度は眼帯を着けてから、泉を覗きこんだ。確かに傷痕は眼帯に隠れるし、眼帯はキラキラと光ってきれいなだけけれど、リタの顔には全然似合っていないかった。なんだか異様な迫力がある。

「サラマンダならきつと似合つのに……」

リタは眼帯を外してポケットに入れ、それから水を汲んで家に帰った。お父さんが鍛冶小屋から戻っていて、眼帯を外しているところを見られてしまった。

「あれは舞踏会用に取っておくことにしたわ」

お父さんにそう言うてから、今度はお母さんに向かつて声をかけた。

「あたし、ペタニ小母さんのところに行って、元気になりましたって挨拶して「ようと思つ。い
いかしら?」

「そうね、そうしなさい」

「じゃあ、いってきます」

リタはお父さんに悪いことをしたような気持ちになったけれど、それもお父さんが心配しすぎるからだわとも思った。

「こんにちは、ペタニ小母さん」

ペタニ小母さんは豚小屋の掃除をしていたが、リタの声を聞くと掃除道具を放りだして駆けてきた。

「ああ、リタ。ごめんよ、あたしのせいで」

「そんなことないわよ、ペタニ小母さん。転んだあたしがいけないだし、ペタニ小母さんがすぐに治療師を呼んでくれなかったら、もっと酷いことになっていたと思うわ。それにもう元気になったんだから、気にしないで」

「でも、そんな顔になってしまって……。あ、いや……。それはそれで魅力的だけれど」

「気にしないで。あたしは気にしないことにしようと思ってるの。でも、うちではお父さんが問題ね。あのうるたえぶりは見ていられないわ」「ガラムかい。男親つてのは娘がかわいくて仕方がないものなんだよ。でも、リタ。ほんとにお前は変わってないね。さすがはマルカの娘だよ」「時々そう言われるけど、どっぴい意味なのかしら」

「マルカは偉い女だっことわ」

「お母さんは好きだけれど、あまり偉いとは思えないわ」

「そのうちわかるわ。それはわておき、せうかく」

来たんだ、塩漬け肉を持って行っておくれ。その前に豚小屋の掃除を片づけちまうから、ちょっと待ってておくれ」

「よければあたしも手伝うわ。せめて働き者だという評判だけでも立てなければならぬと思ふの」

ペタニ小母さんはリタをじっと見つめた。

「ああ、手伝っておくれ。助かるよ」

「あたし、サラとカラタ姉さんにも元気になりましたって挨拶して来ようと思つた」

家に帰って昼食を食べ、その後片づけをしている時にリタはお母さんに言った。

「それはいいけれど、疲れていない？ カラタ

さんの家は少し遠いわよ」

「平気よ」

「じゃあ早く帰るのよ」

リタは先にサラの家に寄って、サラを誘って二人でカラタ姉さんの家に行った。

「あたし今日はカラタ姉さんに謝らなければならぬことがあるの」

「あら、何かしら。でも、その前にお茶を飲まない」

カラタ姉さんはそう言ってお茶の用意をした。リタはその間に言うことを整理しようとした。

「あたし、カラタ姉さんからお話の仕方を習って、みんなにお話をしたりして暮らして行けたらいいなと思っていたの。でも、それは誰かと結婚して、おかみさんの仕事をしながら、お話もしようと思っていたのよ」

「そのどこが悪いの？ あたしも同じようなことを考えているのよ」

サラが口をはさむ。

「そう思っていたのだけれど、なんか怪我をしてこんな顔になってしまったでしょ。これじゃ、おかみさんはちょっと無理かも知れないと思うのよ。だから、どこかの組合の見習いにしてもらおうと思っっているの。そうだったら、お話を習うことは出来そうもないわ。だから今のうちに止めてしまおうと思うのよ」

サラは黙ってリタを見つめた。

「それに、サラはとってもお話が上手だわ。だから、カラタ姉さんの弟子はサラだけで大丈夫だと思っわ」

「わかったわ。リタがお話を習うのを止めたいというのならそれは構わないわ」

そう言うってから、カラタ姉さんは続けた。

「でも、暇のある時はお話を聞きに来てね。あたしもお話をしないでいると、忘れてしまうかも知れないし、サラだって、聞き手のいるところでお話をする練習をしないと上達しないから」

「そうよ、リタにはぜひ聞いてほしいわ。リタがお話を聞きに来ないなら、あたしがリタのところへ話しに行くわよ」

「それじゃあ、今までと変わらないわ」

「無理して変える必要はないのよ」

リタはなんだか釈然としなかったけれど、お話が嫌いになった訳ではないので、これからもお話を聞いていいというのはうれしかった。

それから、サラが義賊のお話の続きを聞いてと言ったが、今日は早く帰る約束をしたからと言って、リタはカラタ姉さんの家を引き上げた。

「お母さん、あたしどこかの組合の見習いにしてもらおうと思うのだけれど、どこがいいかしら」

リタは家に帰るとお母さんに相談した。

「急にどうしたのよ」

「あたし今朝からいろいろ考えたのよ」

「何を考えたの」

「今朝、泉で顔を見て思ったの。これじゃあ、王子様から舞踏会に招待されたりしそつもないわつて。それから、王子様じゃなくてもあたしと結婚したい人なんていそつもないと考えたのよ」

「そんなことないわよ、リタ」

「そつなの。その次に考えたのは、あのノラムとかが格好の結婚相手だと思つかも知れないつてこと。もつと悪いのは、好色なケベツク爺さんとかに言い寄られたらどうしようかつてこと。この顔ではそつという申し出を断つたら失礼に当るのじゃないかしら」

「そんなことはあたしが許しませんよ。お前は、お前の好きな相手としか結婚しないでいいのよ」

「あたしも嫌な相手と結婚するつもりはないわ。でも、何の取り柄もない女に親切で結婚を申し込んで来た男の人を断るのは、気分のいいものじゃないわ。だからあたしは取り柄を持つとつて思つ」

「わかつたわ。でもこのへんで組合に入つているのはお父さんくらいしかいないわよ。あなたに鍛冶屋は無理だと思つから、組合に入るには街に出るしかないと思つわ。それに紹介状も必要だし。いずれにしても、お父さんと相談しな

ければならないわね。お父さんはあなたが街に出ると悲しむと思うわよ」

「許してくれないかも知れないわ」

「そうね、今はお父さんも動揺しているから」

「街にはどんな組合があるの」

「そうね、女の子が入れる組合は多くはないわね。お母さんが入っていたお針子組合、染め物組合、金銀細工組合、時計組合も女性でも大丈夫だったかしら。あとはいかががわしい組合があるけれど、それは許しませんよ。それから髪結い組合。占師も組合を作るといふ相談をしていたらしいけれど、占ってみたら、よくないといふので止めたらしいわ。あら、ひとつ忘れていたわ、治療師組合」

「治療師ってこのあいだ来てくれた人でしょ。この村にいるじゃないの。弟子入り出来ないかしら」

「どうかしらね。ハンナには借りがあるから、この上無理を言いたくはないのだけれど。でも、治療師組合は一級の組合だから、確かに十分な取り柄と言えるわね。でも、確か弟子入りするにも試験があるのじゃなかったかしら。ハンナに聞いてみないとわからないわね」

「あかし、治療師になりたいわ」